

# 山形大学附属博物館報 11

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

1984. 10. 15

## 目 次

- 新任の挨拶をかねて ..... (1)  
中国の博物館 ..... (2)  
南ヨーロッパの博物館など ..... (3)  
資料紹介—花粉化石の新種— ..... (4)  
昭和59年度公開講座「明治の山形」、特別展「明治の山形」 ..... (5)

## 新任の挨拶をかねて

館長 大 津 高

今回はからずも川副名館長のあとをうけて附属博物館長の座を汚すこととなった。私にはそのような大任を果せる自信は全くないが、しばらく当館に関係していた都合上、運営委員会の決定に従わざるを得なかったのである。大體私は、いわゆる長となるには不向きな人間であることは、小学校での校長の失敗から身を以て感じており、以後ひたすら物云わぬ動物たちを相手に、黙々とすごして来たつもりである。その動物学がきっかけとなって博物館運営委員の一員となり、ついに館長ということは、何か因縁めいたものを感じないわけにはゆかないのである。

さて一国の文化の程度は博物館で分るといわれる。それはその筈で、博物館は文化財の収集・管理・保存・展示などを主たる業務とする組織だからである。文化財とは、先祖の人たちが作り残して行ったすべての物の中で、子孫たちが「これは美しい」「これはすばらしい」とそれらの作品に共鳴し、価値を認め、大切に保存して来た作品で、それを保存・観賞・継承して行くのが文化人であろう。そして文化人の力がよく行き互っている国家が文化国家である。

だが、この文化を保って行くのは容易なことではない。平和な、衣食のみち足りた現在の日本ですら、思わぬ災害があり年々これらの文化財は消えて行く一方で、真物は如何に努力しても復元でき

ないのである。近ごろでも法隆寺の壁面の半消失のような、傷ましい事故がたえない。先日、日本最古の天守閣のある古城といわれ、「一筆啓上火の用心……」で有名な、勇将本多作左衛門の居城、福井草の丸岡城を見学して来たが、福井大地震の折、その石垣が崩れ落ち、国宝から重要文化財に格下げになった、という話をきいたが真偽のほどは確かめていない。

世間一般の文化財の過剰な、美術・歴史・民族考古などの資料が主体を占め、その素材となった動・植物、鉱物などはあまり重視されない傾向にある。それは動・植物はその生きていた時の姿が、最も特徴的な存在であるとすれば当然で、そのためには動物園や植物園、そして近ごろは自然公園が大幅に拡大設置され、自然の保護・修復などの管理を及ぼすながら行っている。したがって博物館は歴史の古い中国やヨーロッパで著しく、その多くは歴史・考古博物館のようである。

一方歴史の浅いアメリカなどでは、自国の素材の博物館を作ろうにも、立派なものとは作れぬらしい。それで仕方なく、入植以来国民が豊かな資力に任せて集めた他国産の文化財や文物を集め博物館としているものが多いようである。そして、他はその地に出土するインディアンや先住民族の考古資料や、化石、動・植物の収集を主体とする自然史博物館的なものようである。ただ近代に大発展した集物の博物館は、アメリカの国土が特に広大なことと相俟って、世界に冠たるものがある。

ひるがえってわが山形大学附属博物館を見よう。本館はもともと教育学部の前身、山形師範学校時代からの地理・歴史研究室の収集物を中心に設立

された。したがって県下各地、特に田舎の寒村からも、当時の教授の方々の依頼に応じて、後髪を引かれる思いで、あるいは泣く泣く祖先伝来の宝を寄託したものも多い筈である。私はこの土地住民のまごころの協力に感謝し、先づこれらの物を大切に保管して行く義務があると思っている。

このように本館は歴史・考古・民族・美術を主とした普通型の博物館である。幸い、前館長川副先生は、幅広い博物館の識見をもたれ、さらに動植物、工学、農学、医学の部門を新設され、資料収集に努力して来られた。私としてもできるだけ新設部門の充実にかけてゆきたい。各位の協力をお願いすると共に、これ迄種々援助や収蔵物の寄託をされた方々に心から感謝したい。

(理学部 教授)

## 中国の博物館

### 大川 健 嗣

今年7月の訪中で6回目になるが、いつ行っても魅力の尽きない国である。私がしばしば訪中する主な目的は日中両国の農業・農民の友好交流であるが、それに留まらず革命後今日に至るまで継続されてきた中国式社会主義建設の現状と方向性を私なりに把え、社会体制を越えてコントロールに苦しむ農業問題の本質を社会科学者のひとりとして考えてみたいためである。

そうした専門的な話題はともかくとして、私にとって今回の旅の最大の収穫は、江蘇省の揚州から鎮江まで7キロの川幅の長江を船で渡ったことである。この長江それ自体はこれまでも何度となく見てはいるものの、船で渡ってみると改めて全長5,800kmの世界第4位の大河の雄大さを思い知らされた感がする。この長江や黄河(4,800km)、それに有名な万里の長城(約6,000km)をはじめ、いずれをとってみても日本とはスケールが全く違いすぎる。それは、島国日本と大陸中国との自然的地理的差異による部分も大きいと思うが、なによりもやはり歴史の深みと多民族国家であるという民族的文化的バラエティの豊富さによるものと言えるのではなからうか。こうした悠久の歴史は、中国大陸の各地に貴重な歴史遺産を残してきている。いわゆる博物館の類は、その代表的なものである。わが国の国会議事堂に当たる人民大会堂自

体が現代中国を代表する博物館のひとつだと言えよう。現在中国には、22の省と新疆ウイグル自治区など5つの自治区、それに北京・上海・天津の中央直轄市などがあるが、たとえば北京市だけを見ても、明・清朝時代の皇宮であった故宮(紫禁城とも呼ばれる)はもとより、天安門広場を中心にして、故宮に次ぐ中国の代表的な博物館である中国歴史博物館・中国革命博物館・中国美術館・自然博物館・魯迅博物館・少数民族博物館など数多くの博物館及び展示館がある。もっとも北京市



は今、恐らくは世界最大の建設ブーム下にある都市と言えようが、郊外を中心に道路・地下鉄・アパート・公共建築物など、首都の再開発計画が急ピッチで遂行中である。つまり、よく考えてみると、この北京市そのものがかつては城壁で囲まれた都市であったわけで、往時を忍ぶ歴史遺産は街中至る所に見られる。このことは南京なども同様である。

なかでも、中国歴史博物館で、正確な年代は忘れてしまったが何千年前も前に使われたという農業用の暗渠排水施設を見た時の驚きは、今も想起こそすことがある。何故かと言えば、原理的にはすでに何千年前の人類が考案し、かつ実用化していたという事実に対する驚きであり、翻ってみるに、人類史上最先端を歩いていると自負する現時点のわれわれ人類(特に先進国の場合)は、一体実際のところどれほどの進歩を遂げたことになるのかを考えざるを得ないからである。

今回、南京ではいくつかのコースに別かれて見学することになったために、私は歴史コースを選び、南京博物館を見ることができた。南京博物館は1933年に建てられたもので、沢山の文化遺産や美術品が所蔵されており、とりわけ本館の場合、古代絵画をはじめ、明清以来のいわゆる南西各派——吳門、虞山、金陵、京江、揚州——の作品展示物などに特色がみられるようである。また、主に江蘇省内の出土品や文物が収納され陳列されていた。もちろん陳列物の中には、この南京博物館にしかないものもあり、たとえば、東漢の時代(A. D. 25~220年)に除州市内で発掘された「銀縷玉衣」(写真)などは代表的なものである。これは、この時代の金持が自分の生前の威信を後世にまで伝えるべく作られたもので、等身大のサイズで全身は銀糸で縫い合わされた玉石で覆われていた。もっとも発掘された時には、本人の期待に反し、中身はミイラになり切れなかったという。

こうした中国の各都市の博物館はそれぞれに特色があり、前述のごとく歴史の深さと多民族国家の特性を訪れるわれわれに教えてくれる。1973年の12月にはじめて中国大陸を訪れて以来、すでに11年が経過した。これまでに訪問した都市で主要都市をあげると、北京・南京・上海は訪中するたびに行っており、このほかでは広州・揚州・林県・西安・揚州・杭州・鄭州・洛陽・蘇州・合肥・成都・昆明・瀘江などがあげられる。どの都市にも思い出があり、そして行くたびに目に見えて発展し、変貌を遂げる中国に対する関心はますます高まるばかりである。この9月下旬には、日本から同時に3千人の青年が訪中する。私も同行することになるが、今度もまた、まだ見ぬ中国文化に遭遇できることであろう。

(人文学部 教授)

## 南ヨーロッパの博物館など

吉田 三郎

ヨーロッパで有名な大英博物館、ルーブル美術館、さらにローマやフィレンツェなどの博物館・美術館など、この館報ではとても述べきれないし、他にも適当な解説者がいると思われるので、ここでは南ヨーロッパの建造物について解説しようと思う。

地中海に面するコート・ダジュール(紺碧海岸)にはカンス、ニースおよびモナコなどの観光・保養地があり、中でもモナコは不慮の死をとげた吾があこがれのグレース・ケリーとモンテカルロのカジノがある。この町の海岸の高さ75mの急崖に、世界随一といわれる5階建白亜の海洋博物館があるが、道路側の正面からは4、5階だけが地上に



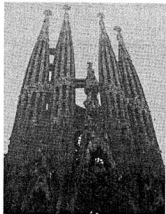
その華麗な姿を現わしている。この建物は、海洋学者として有名なモナコ大公アルベール一世(1848—1922)(ハリウッドの女優グレース・ケリーと結婚したのはレニエ三世)が1910年に建設したもので、海洋研究に必要な各種機器、海産生物、海洋調査成績などが整然と配列されており、水族館も附属している。特に興味をひかれたのは過去から現在までの各種採泥器、バチスカーフ(深海潜水艇)、鯨類の大型骨格標本と対称的に筆者の研究している小型有孔虫の模型が沢山並べられていることだった。この海洋博物館の外に、国王の壮麗な宮邸もあり、少し足をのびて豪華なカジノの建築物を見物するのもよいだろう。ただし、回転するルーレットは我々庶民には無縁な存在のようであった。

(聖家族教会)

バルセロナ

モスクワの聖坊主・聖ヴァシーリー、ウィーンのモザイク・聖シュテファン、135の白大理石の尖塔・ミラノのドゥオーモ、ケルンの二つの大尖塔・カテ

ドラーレ、悪魔の彫刻・ノートルダム、ロンドンのAbbey・ウエストミンスターなどなど、ヨーロッパの数々の大寺院と較べ、白亜紀の砂岩をつみあげた怪奇と神秘、とにかく一切の表現を拒絶するかのような建物がこの教会である。この建物は薄幸な、しかも天才的な建築家アントニオ・



ガウディによって考案されたもので、石の作りあげた神秘の詩とさえいわれる独創的な建築様式をもつ寺院であるが、未完のまま彼はこの世を去ってしまった。今は、彼の弟子と国家の力で、彼の意志をうけつぎ、完成に向ってゆるやかに工事は進行中だが、完成までにはあと200年はかかるだろうといわれている。筆者も上記の外、多くの教会建築を見てはいるが、このサグラダ・ファミリア程、衝撃をうけたものはなく、正面の彫刻や高くそびえる尖塔の穴（窓）から地表を見下した時の身の毛がよだつた強い印象は、2本のフィルムではとても表現などでできなかった。

（コインブラ大学図書館） コインブラ

ポルトガルの首府リスボンの北北東約200km、ジュラ紀の砂岩、泥岩よりなる丘の上に発達したのがコインブラの町で、11～13世紀にかけて、ポルトガル王国創立当初の首都であり、その後ながい間、ポルトガル文化の中心をなして来た。この町にヨーロッパでもっとも古い歴史をもつ大学の一つ(1290年創立) コインブラ大学がある。北ヨーロッパで

は赤～暗赤褐色のレンガ建てが目につくが、ポルトガルでは民家も白の漆喰で明るく化粧されている。この大学も同様である。写真の右端に時計台があり、広角レンズからはずれた更にその右方には、やはりポルトガル建築特有の、2階への階段を正面入口の左右に配した三層の白い講堂があり、



学位授与式はこの中で古式にのっとりて社殿におこなわれる由である。写真の左端に有名な図書館であるが、奥行はとも角、正面はそれ程大きくはない。しかし、一步内部へ入ると、まわりを各種彫刻に飾られた本棚には、この大学の歴史を物語るように、古書が整然と並べられ、近づきたい威厳と静かなたたずまいとを兼ねそなえている。しかし、大英博物館の大図書館のように、多くの研究者が入り出していないらしく、かつてのこの国の黄金時代を思いやる時、何かしら旅人は寂寥とした気持ちにかられるのであった。

（教育学部 教授）

## 資料紹介

### 花粉化石の新種

中澤勝麿

博物館の仕事として主なるものに資料の収集、保管、調査研究、教育普及活動があるが、これらの仕事は、大学附属博物館の場合、不特定多数の一般公衆を相手とする、公立私立の博物館・資料館とは、おのずからその目的・方法において異な

るのは当然である。

大学附属博物館で収蔵保管されている資料は、関連学部の教官と密接な連絡・協力のもとに、学生の一般教育と専門研究のために用いられ、自然と文化遺産の重要性を自覚させるとともに、学生の創造力を養うのに貢献するものである。

さて本館では、長い間地域性をもつ資料の収集・保管に力を注いできたが、最近総合大学としての本学が、発展するに伴い資料も、各学部の部門ごとに広く収集・保管するようになり、本館の性格がより学術的な、あるいはより学際的な総合領域において、特色を発揮する傾向に変わってきた。

現館長である、理学部・大津高教授(生物学)は昭和45年6月30日、台湾の阿里山山中の杉林溪底で発見採集した<sup>3</sup>。の新品種で、昭和48年に動物学上の戸籍に記載登録された<sup>4</sup>サンリシガエル。の完模式と副模式の標本が、本館に保管されたのがその一例である。

また、昨年は、教養部の山野井徹助教授(地学)が富山市近郊の立山町の山の中(飛弾山脈の北西部)の地層から発見した<sup>5</sup>マングローブ。の花粉化石の走査電子顕微鏡プレート(完模式および副模式標本)が本館に保管された。



走査電子顕微鏡で撮影した  
花粉化石の一種



マングローブ Mangrove

マングローブ (Mangrove) (紅樹林) は、温度の年較差10℃以下の熱帯および亜熱帯の海岸、特に河口・入江などの、定期的に海水あるいは半海水に浸され塩沼地に生育する、木本植物の一群で、現在、わが国では、九州種子島・屋久島・奄美大島から沖縄にかけて生えている。

この花粉化石は、山野井助教授が立山町附近の地層(第4紀・更新世)の中から熱帯のマングローブに棲息する貝の化石が出てくるので、これを採集・研究しているうち、マングローブに棲息する貝が出るなら<sup>6</sup>マングローブ。に関わる何んらかの化石もあるではないだろうかという仮説をたてて探したところ、発見したものである。

その研究成果を論文にまとめ、それを、昭和58年8月5日に、<sup>7</sup>Review of Palaeobotany and Palynology, 40 (1983/1984):347-357. に発表したところ、世界の学術界から<sup>8</sup>花粉化石の新品種。であることが承認された。

マングローブの花粉化石が、富山平野から発見されたことによって、今から1,600万年前頃の富山湾は、飛弾山地の山麓まで、深く入り込んでいて、しかも、その頃この地域は、亜熱帯性の気候であったことが証明できる唯一の資料で、わが国の地史研究上価値の高い学術資料であると言える。

このように、大学附属博物館は、学術的価値の高い、研究資料を豊富に収集・保管し、これを大学の研究と教育に役立たせ、これからの文化発展に寄与できるよう、将来ますます努力しようと思う。

(附属博物館学芸員)

## 昭和59年度

### 公開講座「明治の山形」

今年度の公開講座は「明治の山形」と題し、歴史のうねりの中で近代国家のあけぼのとして大きく変わっていった「明治」という時代を、政治・経済・文化・社会生活等の面から、学内関係学部教官の講義に学ぶものである。

#### 1. 期間及び時間

昭和59年9月1日、8日、29日、10月6日、13日の各土曜日。計5回。午後1時30分から5時30分まで。

## 2. 講師及び講義科目

回 月 日	講義科目	時間	宮職氏名
第1回 9月1日	開講式	30	教育学部助教授 石島 廣 男
	教育県山形の系譜	120	
	—教育資料館の 見学—	〃	
第2回 9月8日	明治の農業と漁村	〃	教養部教授 好 田 忠 雄
	明治の都市	〃	教育学部助教授 中 川 重
第3回 9月29日	山形英字事始 —天沢の洋学会(外国 語学校)を中心に—	〃	教養部助教授 松 野 良 寅
	山形に於ける明治の 工人と業態の変遷	〃	教育学部教授 佐 藤 正 巳
第4回 10月6日	明治期の山形県 製糸業の発達と 経済政策	〃	教養部教授 森 芳 三
	〃	〃	〃
第5回 10月13日	明治九年大久保 利通の山形視察	〃	人文学部助教授 板 垣 哲 夫
	鉄道の開通と 水運の消滅	〃	教育学部教授 横 山 昭 男
	終了式	30	

### 昭和59年度 特別展「明治の山形」

特別展「明治の山形」は歴史・美術資料を中心に、下記の要項で開催される。

#### 1. 期 間

昭和59年10月20日(土)から31日(水)まで。

#### 2. 主な展示資料

- 明治の山形略年表(図表)
- 統一山形県ができるまで(図表)
- 初代県令 三島通庸(写真)
- 明治初期県政の布達類及び関係文書
- 明治期の地図  
(大小区制全県地図、東村山郡図、北村山郡図、その他)
- 明治期の山形市街風景写真
- 明治期の美術  
・建築—明治期の洋風建築写真(パネル)その他、

- ・絵画—細谷風翁画「竹」、細谷米山画「岩山」その他。
- ・彫刻—新海竹太郎「孔子の像」
- ・刀剣—月山貞一「短刀」
- ・書蹟—斎藤篤信「漢詩」、海上流平「和歌」その他。

#### ●明治の山形参考文献

#### 昭和59年度学芸員資格取得の ための博物館実務実習実施者

学 部	履修者数	合 計
人 文 学 部	31 <sup>A</sup>	67 <sup>A</sup>
教 育 学 部	13	
理 学 部	23	

#### 昭和58年度見学者総数

一 般 成 人	個 人	501 (人)
	団 体	73
大 学 生	個 人	211
	団 体	310
児 童・生 徒	個 人	56
	団 体	188
合 計	個 人	768
	団 体	571
	総 数	1,339

山形大学附属博物館報 第11  
1984.10.15発行  
編集発行人 山形大学附属博物館  
(〒990) 山形市小白川町1丁目4-12  
☎0236-31-1421 (内)2921